

平成 2 1 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（A）  
 研究期間：2005～2008  
 課題番号：17202013  
 研究課題名（和文） 17-18世紀アジア諸地域の港町における異文化交流の諸相の比較研究  
 研究課題名（英文） Comparative Studies on Cultural Interactions in Asian Port Cities  
 In 17-18<sup>th</sup> Centuries  
 研究代表者  
 氏名（アルファベット）羽田 正（HANEDA MASASHI）  
 所属機関・所属部局名・職名 東京大学・東洋文化研究所・教授  
 研究者番号 40183090

研究成果の概要：日本を含むアジア海域の歴史に関する国内、国際研究ネットワークの形成と拡充、若手研究者育成など研究組織面での成果に加えて、研究内容の面でも、長崎研究を活用したアジアの港町における異文化交流の実態、政治と経済の関係からみたインド洋海域と東アジア海域の性格の違い、同じ海域に属する広州と長崎という二つの港町における外国人への対応の微妙な相違とその後世への影響などの諸点を明らかにし、次の新たな共同研究計画につながる多大な成果を挙げた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	14,700,000	4,410,000	19,110,000
2006年度	9,800,000	2,940,000	12,740,000
2007年度	8,600,000	2,580,000	11,180,000
2008年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
年度			
総計	37,500,000	11,250,000	48,750,000

研究分野：歴史学

科研費の分科・細目：史学一般

キーワード：港町、異文化交流、長崎、東インド会社、海域

## 1. 研究開始当初の背景

従来、東インド会社文書を用いた研究は、この会社のアジアへの発展史や会社自体の経営史をあとづけること、会社の貿易の実態を明らかにすること、会社の発展と本国の政治経済情勢の関係を明らかにすること、各東インド会社同士の相違や対抗関係を明らかにすること、など、主として、ヨーロッパの政治、経済史の枠組みの中で行われてきた。東インド会社の進出に対する現地社会の対応を、現地の史料も用いながら現地の側に立って社会史的な視角から研究した例は、ほとんど存在しなかった。唯一の例外として、オラ

ンダ商館のあった長崎の都市社会に関する日本の日蘭交渉史専門家による堅実な研究の積み重ねを挙げることができる。しかし、彼らの豊かな研究成果は、もっぱら日本史と対外交渉史の枠内で利用され、理解されているだけだった。本研究は、長崎に関する日本人の研究成果を一種の「ものさし」として利用し、他のアジア諸地域の港町社会を同様の視角から分析、検討することを通じて、レベルの高い日本の長崎研究を世界史の文脈に解き放ち、同時に前植民地期アジア諸地域の港町についての知見を飛躍的に拡大させることを目指した。実証的な歴史研究の手法が

確立し、日本史と外国史の研究者が協力して研究を進めやすい環境が整っている日本でしか実現し得ない独創的な研究だと考えていた。

## 2. 研究の目的

17-18世紀のアジア諸地域で、ヨーロッパ諸国の東インド会社が商館を置いた港町を6つ取り上げ、そこでの異文化交流のあり方を次の6つのポイントに絞って比較検討する。(1) 港町内部における東インド会社商館やアジア諸地域の商人のコミュニティの位置、所有関係、建物の特徴、(2) 現地の人々と外来の人々の間での言語コミュニケーションの方法、(3) 商取引と荷物運搬の方法、(4) 現地の政治権力と外来の人々の関係、紛争の法的処理方法、(5) 男女関係のあり方と混血児の社会的地位、(6) 衣服、食物、技術、思想、芸術などの受容や拒絶の諸相。主として取り上げる港町は、長崎、広州、バタヴィア、マドラス、スラト、バンダレ・アッパースである。これらの港町について、上記の6点を比較することにより、港町とその背後にあるアジア諸地域の社会の特徴を明らかにし、それがこの2世紀の間どのように変化したのかを具体的に提示する。

## 3. 研究の方法

(1) 国内での各種研究会の開催：「長崎研究の回顧と展望」、「東インド会社研究会」それに、主として取り上げる5つの港町における異文化交流の諸相に関する研究会などを順次開催し、共同研究参加者間での意見交換と情報共有を行う。

(2) 現地調査：可能な限り、6つの港町とその周辺を実際に歩き、都市計画や建築物の遺構調査を行う。また、現地在住の研究者との意見交換を行う。

(3) オランダ、イギリス、フランス東インド会社関係の資料を収集し、各研究者がそれぞれのテーマについての個人研究を実施する。

(4) 国際会議の開催：国内での研究会開催がある程度進み、共同研究者の間で研究方法と目的、それに途中までの成果が共有されるのを待って、関連する分野を研究する外国人研究者とともに国際会議を開く。日本の研究の国外発信、海外の研究者との意見交換を通じたネットワーク作りがその主たる目的である。

(5) ホームページを通じた情報発信：主な研究会や現地調査の結果は、本研究のホームページを通じて、速報する。

## 4. 研究成果

< 研究の組織化についての成果 >

(1) 国内研究ネットワークの整備・拡充：従来、別々に研究を行っていた日本史、アジア史、西洋史の研究者が一緒に研究会や調査を行う機会が多くあったため、「アジア海域史」「異文化交流史」さらには「世界史」を考えるための共同研究ネットワークが樹立された。このネットワークは、2009年度から開始される新しい科研費の研究プロジェクト「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」の基盤となり、今後さらに発展することが期待される。

(2) 国際ネットワークの樹立と拡充  
本科研で独自に開催した2度の国際会議とメンバーが個別に参加したその他の国際会議、さらには研究代表者が編集した英文論文集の刊行などを通じて、東アジア海域史に関心を持つ外国の研究者（特に、中国、オランダ、フランスなど）との交流が進み、確固とした国際的な研究者ネットワークが樹立された。今後、このネットワークを拡充させ、さらに活発な国際交流を行うことによって、日本で蓄積された関連分野の高度な研究業績を効果的に発信することができるだろう。

(3) 若手研究者の育成

大学院博士課程の学生や日本学術振興会特別研究員など相当数の若手研究者を、研究協力者とし、研究会、読書会や現地調査などに連携研究者と同じ資格で参加させた。協力者となった若手研究者の問題意識の高まりと方法論の洗練には眼を瞠めるものがあり、外国での関連分野の学会に積極的に参加して研究報告を行う者も複数現れた。

< 研究内容面での成果 >

(1) 世界史の中での長崎研究

江戸時代における長崎の歴史に関する日本人研究者の実証的で高度な研究成果と研究方法を活用し、比較の手法を用いて、アジアの他の港町における異文化交流の具体的な様相を、相当程度明らかにした。また、逆に、これらの港町の歴史を考慮に入れることにより、長崎における異文化交流が有した世界史上の特徴を明らかにした。具体的には、外国人コミュニティへの対応、通訳の役割、外国人女性や混血児の社会的地位についてなどである。

(2) アジア海域の多様性

従来の研究では、地中海やバルト海などヨーロッパ周辺の海域と対照的に、「アジア海域」が全体として把握され、その特徴が議論、理解、叙述されてきたが、少なくとも、インド洋海域と東+南シナ海域には、政治と経済の関わり方に大きな相違があることを明らかにした。そして、17-18世紀のインド洋海域を「経済の海」、東+南シナ海域を「政治の海」と特徴づけた。

(3) 東+南シナ海域内での比較

本研究が対象とする時期には、清朝、徳川政

権が共にヨーロッパ船の来航を制限していた。広州と長崎というヨーロッパ船の寄港が許された町における異文化交流の諸相を比較することによって、(2)で「政治の海」と定義した東+南シナ海域においても、地域によって外国人への対応に微妙な濃淡があることを明らかにした。

(4)ヨーロッパ東インド会社の組織とアジア海域での活動の総合的把握  
従来、各国別に研究、叙述されてきたヨーロッパの東インド会社の組織や活動を全体としてどのように評価し、理解するかについて、一定の見通しを得ることができた(羽田正『東インド会社とアジアの海』参照)。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計34件)

松井洋子「長崎出島と異国女性 - 「外国婦人の入国禁止」再考 - 」『史学雑誌』118-2、2009年、pp.1-36.

Haneda Masashi, “Europeans at Bandar Abbas and the ‘state’ of Persia in the 17th and 18th Centuries”, Hoffmann, B. & M. Ritter (ed.), *Iran und iranische geprägte Kulturen*. Wiesbaden, 2008, pp.85-93.

羽田正「イスラム世界と新しい世界史」水島司(編)『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社、2008年、pp.66-76.

Fukasawa Katsumi, “De l’Inde au Levant: routes du commerce, routes des indiennes”, in: Gérard Le Bouëdec et Brigitte Nicholas (dir.), *Le gout de l’Inde*. Musée de la Compagnie des Indes & Presse Universitaires de Rennes, 2008, pp.34-43.

Mizui Mariko, “English Tin Exports under Pre-emption 1600-1640”『九州工業大学研究紀要(人文・社会科学)』56、2008年、pp.1-9.

Haneda Masashi, “Modern Europe and the Creation of the ‘Islamic World’”, *International Journal of Asian Studies*, 4/2, 2007, pp.201-220.

村尾進「乾隆己卯-都市広州と澳門がつくる辺疆-」『東洋史研究』65-4、2007年、pp.39-72.

Haneda Masashi, “Les companies des Indes Orientales et les interprètes de Bandar ‘Abbas’”, *Eurasian Studies*, V, 2006, pp.175-193.

[学会発表](計43件)

Haneda Masashi, “Japanese Historical Studies in Crisis and a New World History”, in: LIA Workshop of Today-CNRS. 2008年

11月25日、東京大学

Murao Susumu, “Huaiyuan-yi, Factory and Macao: Emperors and Christianity in 18<sup>th</sup> Century Canton”, in: *Canton and Nagasaki Compared*. 2007年12月6日、マカオ政府文化局ホール(中国)

Matsui Yoko, “The Legal Position of Foreigners in Nagasaki during the Edo Period”, in: *Workshop on Cultural Interactions in Asian Port Cities*, 2007年10月13日、東京大学

Nagashima Hiromu, “The Factories and Facilities of the East India Companies in Surat: Locations, Building Characteristics and Ownership”, in: *Workshop on Cultural Interactions in Asian Port Cities*, 2007年10月13日、東京大学

Haneda Masashi, “Canton, Nagasaki and the Port Cities of the Indian Ocean”, in: *Annual Meeting of the Association of Asian Studies*. 2007年3月25日、Boston (アメリカ)

Fukasawa Katsumi, “Les grandes étapes du commerce du Levant à l’époque moderne”, in: *Séminaire d’Histoire maritime*, 2006年12月19日、Université de Paris IV-Sorbonne (フランス)

横山伊徳「港町としての長崎」2006年12月17日、国立歴史民俗博物館

[図書](計12件)

Haneda Masashi (ed.), *Asian Port Cities 1600-1800. Local and Foreign Cultural Interactions*. NUS Press & Kyoto University Press, 2009, 233+ xvip.

ピエール=イヴ・ボルペール著、深沢克己(編訳)『「啓蒙の世紀」のフリーメイソン』山川出版社、2009年、142p.

羽田正『東インド会社とアジアの海』講談社、2007年、390p.

深沢克己『商人と更紗：近世フランス=レヴァント貿易史研究』東京大学出版会、2007年、328+xivp.

羽田正(編)『ユーラシアにおける文化の交流と転変』東京大学東洋文化研究所、2007年、265+viiiip.

フィリップ・オドレール著、羽田正(編)『フランス東インド会社とポンディシエリ』山川出版社、2006年、130p.

歴史学研究会(編)羽田正(責任編集)『港町に生きる』青木書店、2006年、347+xiip.

歴史学研究会(編)深沢克己(責任編集)『港町のトポグラフィ』青木書店、2006年、354+xiip.

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況（計0件）

〔その他〕

（1）報道関係：

日本経済新聞 2006年1月20日夕刊「長崎研究に活気」で取り上げられた。

インド・スーラトでの調査の際にインタビューを受け、現地の新聞2紙に記事が掲載された。

(<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/haneda/India%20Report%20on%20local%20newspaper.html>)

（2）本研究ホームページ：

<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/haneda/sub1.html>

## 6．研究組織

(1)研究代表者

羽田 正 (Haneda Masashi)

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号：40183090

(2)研究分担者

(3)連携研究者

長島弘 (Nagashima Hiromu)

長崎県立大学・経済学部・教授

研究者番号：10145964

深沢克己 (Fukasawa Katsumi)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：60199156

松井洋子 (Matsui Yoko)

東京大学・史料編纂所・教授

研究者番号：00181686

水井万里子 (Mizui Mariko)

九州工業大学・工学部・准教授

研究者番号：90336090

村尾進 (Murao Susumu)

天理大学・国際文化学部・教授

研究者番号：10239478

横山伊徳 (Yokoyama Yoshinori)

東京大学・史料編纂所・教授

研究者番号：90143536